



洋画家

絹谷 幸二

Koji Kinutani

『飛鳥』舞台美術について

昨年春の春ごろだろうか。旧知の愛くるしい牧阿佐美さんから、「絹谷さん、『飛鳥』という奈良を舞台にしたバレエを計画しています。ついては、その舞台美術を手伝ってくれませんか」とのご相談を受けた。私は二つ返事で承りましたと即答したのだが、この答えを出す数分間、私の頭の中は全力回転した。私の作品と、バレエに一生涯をかけて打ち込まれている真摯で静かではあるが先生の激しく熱い情熱と、はたしてコラボレーションできるのか。お役にたてるだろうか。成功するか…など、激しく私自身の身体の中でYESという答えを求めて葛藤したのだった。そもそも私の人生の中でNOという答えはほんの少ししかないのだが、YESと言ってご迷惑をかけてはならないという信念があった。数分後、先が晴れてお手伝いさせていただくこととなった。

そもそもバレエも絵画も突き詰めれば無言劇であり、言葉の無い世界である。それだけに大変深い世界なのだ。動き(ムーブメント)、調子やバランス、舞台の表情、空間やリズムの間合い。優美さや内面の深さ、哲学や宗教などといったあらゆるエッセンスが言葉の無い世界で語られる、「以心伝心」。心と心が通い合う「一目瞭然」の世界。国境や異民族、言葉の違いをも軽々と飛び越える自由自在な翼を持っている。それだけに深く難しく、しかし、やりがいのある世界でもある。

私は自身の作品を作る時、一作ごとに一歩でも半歩でも前に進まなければならないと日頃思っていることもあり、この舞台はかつてのどの作品とも異なる表現をしたいと思った。そこでこの度、Zero-Tenの榎本二郎君の協力を得て、バレエでは世界初演であろうか、私の絵と牧阿佐美先生のお作とを光のマッピングによる仮想空間上で共演するという演出を試みようとした。

いわゆる作り物による大道具・小道具の無い広い空間で、光とバレエダンサーのムーブメントが限りなく自在に心の中の世界が描き出されれば良いかなと思った。また、私の画中に飛鳥の雲や自然を取り入れ、舞台の主役の動作をむやみに邪魔しないようにとも心がけた。

果たしてどの様な舞台になるか…そしてもしこれが成功すれば、バレエの世界に新風が巻き起こり、舞台装置の無い小劇場や、野外の星降る自然の中でもバレエ公演ができれば良いなども思っている。

最後に、この『飛鳥』は牧阿佐美先生の御母堂、橘秋子先生の原作を牧先生が母を慕って新制作リメイクされたと聞き、母と子の深い絆、母を想う牧先生の深い想いが込められていることをお伝えするとともに創立60周年記念公演『飛鳥』のご成功をお祈りしたいと思います。